

## A-5. 「アメンボが来た!」(稲作から広がる経験)

昌平幼稚園(東京都千代田区)

[5歳児]

4歳児の3学期、みんなで田んぼ作りの相談をし、園庭の夢の地図を作成したり、幼児・保護者・教師のみんなで協力して水田作りをした。そして、5歳児になった4月に水を張り、5月には田植えをした。

「この水田を中心とした自然物とのかかわりの中で、幼児が経験していることを探り、自然を愛する心を育てるための環境の工夫や指導の在り方を探る」ことを研究のねらいとし、稲作から広がる5歳児の1年間の経験の見通しを持って進めた。その中で、偶発的な虫との出会いにより、飼育地の特徴、生き物の違いなどに関心を向け、様々なことに気付きながら継続的にかかわりを持った事例である。

### 前日までの様子

5月に小さなアメンボが2・3匹飛来したのをとても喜び、水田のそうじや水の入れ替えの時に観察したり、容器ですくって遊んだりしていた。

### 6月3日(木) アメンボがいなくなる

水の入れ替えをしているうちにアメンボの姿がなくなっている。「大変!アメンボがみんないなくなってる」とT児が気付く。「どうして?」「死んじゃったの?」などと言いながらみんなで池や湿地帯を探すが見当たらない。水と一緒にアメンボを汲み出してしまったのかと思い、水路の方を探すが見つからない。「どこに行ってしまったんだろう」「水を換えすぎたのかな」と心配する。

その後、毎日のようにアメンボを探すが、見当たらず、幼児たちはアメンボの姿がなくなってしまったことを残念がる。

### ■ 分析

- アメンボが来たことを喜んでいただけに、なぜいなくなってしまったのか関心をもち、原因を考えようとしたり心配したりしている。
- 毎日探す姿から、アメンボがいなくなったことが幼児にとっては一つの事件であったことがわかる。

### 6月16日(水) アメンボ再び飛来

アメンボが1匹見つかる。「戻ってきたんだ!」と数名の幼児が喜んでみんなに知らせる。「アメンボが戻ってきた!」とみんなで喜ぶ。「ほかのアメンボはどうしたんだろう」「雨が降れば来るかも」と、M児は少なくなってしまったことを心配している。湿地帯の葉の後ろなどをめくって探す幼児もいる。

### ■ 分析

- 幼児にとっては、自分たちの水田に来たアメンボはとても貴重な存在であったことがわかる。戻ってきた(出現した)ことがうれしく、友達同士で喜び合い、ほかのアメンボについても戻ってくるのではないかと期待し、想像している。

### 6月30日(水) 雨の日の観察

雷がなり、雨が降る中を観察に行く(昨日も雨が降っている)。水田を見ると、アメンボがたくさん増えている。「やっぱりそうだ!雨が降らないとアメンボ来ないんだ」とM児が叫ぶ。「本当だ!M君が言った通りだ」と教師も驚く。突然数が増え、大小のアメンボが水面いっぱい動いている。「アメンボって空中を飛んで来るんだって」と教師が言う。「違うよ、水の中に隠れてたんだよ。雨が降ったから外に出てきたの」とT児が言う。タニシも数が増えている。「タニシ、雨が降ってるからうれしそうだね」とU児が言う。「タニシ君、本当にうれしいんだよ、だってこんなに動いてるもん。ピチャピチャ音がしてうれしいんだね。いつもはぼーっとしてるのにね」とR児もうれしそうに言う。見ると、たくさんのタニシが水田を歩き回っている。教師が水田に登って来ているどじょうを見つける(どじょうは6月11日に近所の方からいただき、放している)。「どじょうも雨だといいい気分水田に遊びに来るんだね、でも見られると恥ずかしいからって隠れてるよ」とW児が言う。

保育室に戻ると、さっそくM児・Y児が探検の図鑑でアメンボのページを開いて見ている。“アメンボの釣り方”“音叉を使ったアメンボの集め方”などが書いてあり「これ、やってみたい」と言う。「アメンボがいっぱい増えたからできるね」と教師が言うと「やったー！明日はアメンボ釣りをしよう！」と喜ぶ。

### ■ 分析

- 雨の日にはいつもと生き物の様子が異なることは、大きな発見である。5歳児でも、幼児は自分たちと同化して見るため、雨の中でうれしい、音が楽しい、など生き物の気持ちを自分と関連付けて想像しながら見ている。
- M児が先日予想していたことが当たっていたので、M児自身とてもうれしかったと思われる。教師は先日もM児の言葉をそばで聞いていたため、そのことに気付き、共感することができた。
- 教師が自分の知っていること（アメンボが飛んでくること）を教えるが、T児はそれを否定し、自分の考えを正しいものと思っている。正しいことを教えようと思ったが、今は幼児が自分なりに予想したり想像したりしながら考えること自体を認めていくようにすることの方が大切である。
- アメンボに関心が高まり、図鑑を見るようになってきた。科学的に試してみたい、という気持ちが出てきている。

### 7月5日(月) アメンボ釣り実験

たこ糸の先にハムを付けて、幼児と教師とでアメンボ釣りをする。魚肉ソーセージにはあまり寄って来ないことがわかる。また音叉で集める実験は、教師が行い、幼児たちはじっと見ている。あまりよくわからず、図鑑にかいてあるようには集まらず、がっかりする。洗面器の中にアメンボを入れていろいろに試すことを楽しむ。ひとしきりアメンボ相手に遊び、「アメンボ君、ありがとう」「バイバーイ、元気でね」などと言いながら捕まえたアメンボは元の湿地帯に戻す。遊んでいるうちに、足の形や動きに詳しくなっている。

### ■ 分析

- 自分たちの水田・湿地帯にいるアメンボと触れ合ったり、いろいろなことをして試したりすることで、アメンボの生態を知っていくことがわかる。
- 元に戻す、というところで、生き物を大切に思う気持ちの実現できる。



### ◆ 考察

- 園庭に水田・池・湿地帯などがあることは、幼児が関心をもった生き物に、毎日継続してかかわることができるよさがある。季節・気候によって変化する生き物の様子に驚きや不思議さを感じることは、幼児の感性や知的好奇心を刺激している。
- 5歳児になると、常に友達と一緒に生き物とかかわることが多く、自分の発見を言葉に表して伝え合いながら遊んでいる。そのことは、自分なりに考えたり想像したりするだけでなく、友達の考えや感じ方を知り、自分自身の考えを広げることにもつながっている。
- 生き物に親しむ親しみ方はいろいろであるが、科学的な実験をしたくなることもある。教師がそういった欲求も実現できる環境を用意することで、より対象物のことを知る機会となるとともに、一緒にいることで、幼児が行き過ぎたり生き物をむやみに殺したりするようなことは起こらないようにする必要がある。また、生き物を元の生育場所に戻すことで、生き物の生活も大事にしてあげる気持ちを育てていくことが大事である。

## ポイント

子どもたちは、自分たちの作った水田にアメンボが来たことを、とても喜んで観察していたので、「いなくなった！」ということも「戻ってきた！」ということも、「事件」になるほどの大きな気付きです。この心が動かされる気付きにより、「どうしたんだろう?」「雨が降ると来るかも」とアメンボの居場所やアメンボの好む状況などに思いをめぐらせ、観察したり調べたりする姿が引き出されています。図鑑で調べることで、アメンボ釣りをする活動につながり、積極的なかかわりをすることができました。そして、アメンボへの親しみが深くなり特徴や生態を知ることへとつながっていきました。さらに、水田にいる生き物への関心が高まり、観察やかかわりが深まっています。こうした子どもたちの姿から、「科学する心」の育ちが伝わってきます。